

書 評

山田安彦教授退官記念論文集記念会 編：

『転換期に立つ地域の科学』

古今書院 1993年3月

B5判 344ページ 14,000円

山田博士は、明確な研究目的をたて、その理論的位置付けをした後に事例を述べる方法で、歴史地理学の本質に迫る新しい研究を開拓しようと、ひたすら40年間模索し続けられた。本書は、本学会会長でもあった博士が平成5年3月に千葉大を退官されるにあたり、山田安彦教授退官記念論文集記念会（代表古谷尊彦千葉大教授、伊藤安男花園大教授）によって編まれたものである。論文は37編もあるので、個々の書評は短文では十分に言い尽しえないが、いずれも秀作であるし、最後に述べる本書の意義からして、目次に従いすべてを評することにした。

序は、本書集成の指針が博士の意見を的確に組み込んで示される。ついで、浅香幸雄、井出源四郎、谷岡武雄の各先生の祝辞、さらに博士自らの研究生生活史と意欲的な今後の課題が述べられている。

第I部「自然生態系と歴史的環境からみた地域の科学」は、中山正民「日本列島の盆地に関する地域的考察—地理的地形学を中心として—」、日下雅義「ラグーン（潟湖）の形成と消滅」、佐倉保夫「流域の水循環と地下水流動系」、立本英機「転換期に立つ地域の水問題」、高橋学「地形環境分析からみた弥生時代の環濠集落—【もの】の科学から【地域】の科学へ—」、原秀禎「古墳立地研究とその立地類型」、伊藤安男「蘭人傭工師たちの治水思想」、喜多朝子「新しい地域秩序の形成—播磨平野【英賀】の歴史的変容—」をおさめる。

中山は、曖昧な概念の「盆地」を平地と分類し、沿岸平野も大規模なもの以外は盆地としたが、表1の日本の盆地に長井・人吉盆地がなぜないのであるうか。

日下は、古代に重要な船着場のラグーンは、弥生から古墳時代に典型的形態を示し、古代以降縮小するとし、その時に排水目的の人工水路が作られる盛衰過程を明らかにした。

佐倉は、流域の水環境を地下水流動系から検討し、局所流動と広域流動系に区分し、その解明が地下水汚染や水資源開発、土地利用計画などに有益である

として、研究を深化させる方向を示した。

立本は、人間に必要な水問題を、中東や日本を例に、国際河川、異常渇水、地球環境などの視点から論究し、今が転換期とする。

高橋は、考古学が「もの」中心から集落内、集落間に研究が広がるとし、それには地形環境分析が必要とその方法を示す。また、弥生時代の沖積平野の環濠集落の環濠が防御機能より灌漑用排水路の性格があるとするが、すでに中世の環濠集落でも指摘されていることを述べて欲しかった。

原は、今まであまり研究がない古墳立地の類型試案を提唱した。今後は、類型化をおこなって何が解明できるかを具体的に示して欲しい。

伊藤は、日本の河川改修で活躍した蘭人工師が、自国に山がないのに、わが国の地形環境を熟知して、文献やジャフ島の技術で砂防工による治山に目をむけた河川一体観の治水思想で工事をしたとする。

喜多は、景観変遷史の視点から古代条里から論を起こし、中世都市英賀を復原して現在までの過程を検討した。英賀の復原を現在の地域開発政策にどう具体的に生かすかが問題であろう。

第II部「生活生態系からみた地域の科学」は、田中智彦「近世末、大坂近在の参詣遊山地」、浅香勝輔「地域の科学からみた嫌忌施設」、平井松午「北米フロンティア地域の移民行動分析—資料分析を中心に—」、古谷尊彦「モンゴル高原の地名について」、小川都弘「物語・空間・権力—クルクン県（バリ島）水利法典を読む—」、河島一仁「鍛冶・鍛冶屋の通説に関する若干の検討—辞典の記述分析を中心に—」、田中欣治「酒田市吉田八幡神社の土地丈量絵馬」をおさめる。

田中智彦は、大坂近在の参詣遊山地の分布を考察し、範囲2里付近に集中するとした。今後、実際に大坂城下町の人々が参詣した事例の検証が必要である。

浅香は、千葉市の火葬場の立地や消長を検討して、今も残る木造火葬場の文化財的価値を指摘した。

平井は、北米移民研究の基礎統計資料の問題点と分析方法を整理した。今後、これらの視点によった具体的な事例研究が期待される。

古谷は、モンゴルの地名命名法、地名にみられる

自然の認識などを現地調査し、遊牧民がいかに地域を認識して生活することが重要であるかが、地名に投影されているとする。

小川は、バリ島の水利共同体であるスパックの法典にある制裁金の条項を検討し、王を頂点とする領主が法典をよりどころにスパック単位に支配するとし、ギアツの見落としを指摘した。

河島は、鍛冶と鍛冶屋の地理学、民俗学、歴史学の辞典記述を比較した。この成果を踏まえた河島独自の辞典記述を注目したい。

田中欣治は、地租改正時に奉納された土地丈量状況を描いた絵馬を紹介した。ところで、先の河島とこの田中の論は、本部のテーマから若干はずれる感があり、本書全体の流れからみて気になった。

第Ⅲ部「農耕環境からみた地域の科学」は、有菌正一郎「農耕技術研究の地域科学的視点」、小倉真「都市近郊農業の存立形態」、松村祝男「『園地再編対策』の展開過程にみる産地の政策対応について」、阿部和夫「岩手県西和賀地方の農村家屋の特色とその変化」、立石友男「転換期に立つ庄内砂丘の土地利用」、阿由葉司「首都近郊農業の一類型—千葉県柏市のかぶ栽培をめぐる—」、片平博文「サウスオーストラリア州における穀物栽培地域の開発」をおさめる。

有菌は、日本農法の性格とその発展過程を検討し、全体像と未来像を展望できるのが地域科学者であるとする。近代以降の機械化された農業があまり取り扱われていないのが残念である。

小倉は、近年の急激に多様化した近郊農業の概念を三地帯にわけて特徴を述べ、その要因を指摘し、埼玉県日高市の例を考察した。

松村は、構造的「生産過剰基調」に陥ったみかん生産に対する「園地再編対策」を検討し、危機的状況を唱えた。危機脱出の有効手段は何であろうか。

阿部は、西和賀地方の伝統的農村家屋の中門つき直家は秋田県との結びつきによるとし、現代家屋も秋田県と共通しているとする。家屋以外にみられる文化の流れも検討することが望まれよう。

立石は、庄内砂丘を農業が克服した過程を検証し、庄内空港開港で全国市場圏を目指す農業動向に対して、各農家の技術と管理能力が砂丘農業を支えるとし、開港が農業発展につながらないとする。

阿由葉は、東京への食料供給地として位置付けられる首都近郊農業が優位性を低下させた現在、今後

の発展が期待できる千葉県柏市のかぶ生産専業農家に首都近郊農業の新しい型があるとした。

片平は、サウスオーストラリア州の限界地の開発と小麦栽培を検討し、近距離でも冬期の雨量差があり、それが小麦の収穫量に地域差を生み出すとしたが、その両者に関連づけた図表が欲しかった。

第Ⅳ部「都市環境からみた地域の科学」は、戸所隆「東京型都市開発と京都型都市開発—二つの地域論の相剋から協調へ—」、香川貴志「京都市伏見区旧市街地における再開発と景観保全」、朝倉福温「関西国際空港と交通流動の展開」、吉越昭久「ウォーターフロント・プームの背景と課題」、山村順次「千葉県鴨川市におけるリゾート開発と環境保全」、竹内裕一「東京におけるアパレル産業の立地変動」、榎昭一「住工混在地域開発に際しての私見—山形鋳物工業地域の変貌を例として—」、松田松男「外国人労働者の集住化についての一考察」をおさめる。

戸所は、従来対立概念とされた東京型と京都型の都市開発地域論を協調的に一体化させ、新しい地域論形成や地域政策に示唆を与えた。

香川は、伏見区の再開発と景観保全の具体的例から、地理学が積極的に現実問題に参画する必要性を述べた。歴史的景観の評価や保全について、歴史地理学者との論議が深まることを期待したい。

朝倉は、関西新空港の地理的諸問題を総合的にまとめている。今後の具体的な事業展開における現象を追跡していく必要がある。

吉越は、近年のウォーターフロント開発に関する地理学の景観概念規定、地理学者の情報提供や計画参加、教育などによる貢献を具体的に指摘した。

山村は、鴨川市のリゾート開発が地域の特性や住民意向、環境保全を配慮していないとし、その推進こそ真のリゾート開発とする。

竹内は、都市的なアパレル産業を支える、東京の縫製業者の経営危機を論述した。危機脱出の方法が今後の具体的課題となる。

榎は、山形鋳物工業地域の住工混在地域開発における弊害は、地域社会に根ざした職人集団の崩壊、道路優先計画、工場跡地処理などにあるとし、このような地域開発についての研究者の役割を述べた。

松田は、国勢調査に基づいて外国人労働者を取りまく状況と集住化について検討した。今後、実地調査による具体的な検証が必要であろう。

第Ⅴ部「地域体系からみた地域の科学」は、大友

篤「地域科学と地理学」、大石堪山「地域創造への模索」、渡辺利得「地域区分後の科学的展開」、鈴木庸夫「地域情報化における行政情報の提供と法的限界」、高橋伸夫「フランスにおける地域システムの変容」、白井哲之「県史地誌編の編さん動向とその課題」、石井英也「地理学における環境教育実践の一例」をおさめる。

大友は、地域科学の一分野である地理学の研究対象は地域空間にあり、各部門を統一的に貫く空間理論が必要であることを提唱する。これらを模式化した図があれば、よりわかりやすいのではなからうか。

大石は、過疎山村のむらおこしの実態を検討し、中央政府からの上意下達的政策をやめ、地方自治体や住民を中心とした地域づくりの必要性を指摘した。

渡辺は、地理学や地域科学の学問的成果が地域区分後にいかに展開するかは、国際化時代を迎えた現在、地球規模での視点が必要とする。

鈴木は、地域情報化が進む中で、名誉毀損に関わる情報の法的限界を実例に従って検討し、事前に情報主体の事情聴取や弁明、第三者による検討が必要で、その法的統制の整備が望まれるとした。

高橋は、転換期を迎える西ヨーロッパの地域システムを、パリを中心としたフランスの事例を通して考察した。東ヨーロッパを含めた論考を待ちたい。

白井は、各地の県史地誌編を検討し、千葉県史地誌編には社会的視点から地域像を取り上げ、特色ある地誌編にしたいとする。県史刊行を期待する。

石井は、環境問題を地理教育に導入する理論的な視点と調査の中での事例を示した。今後は調査例ではなく、教育現場での実践例の蓄積が待たれる。

以上が、本書におさめられた論文の概要と評者の意見である。この他に「山田安彦教授履歴」と「山田安彦教授著作業績目録」を収録する。

最後に、評者の本書全体に対する意見を述べたい。それは、地域の抱える問題が今さらながらいかに複雑で、たとえそれを見つけても解決する方法を提示することが難しいということである。しかし、地域に直接関与している地理学者は、恐れずに地域から投げかけられている、または隠れている諸問題を積極的に取り上げ、総合的にとらえて回答することが役目であり基本姿勢である。このことは、山田博士の、地域の招福が地理学の使命であるとする永年の持論に共通し、千葉大教養部の総合科目設置、編著の『総合 地域の科学—水と地域のかかわり合い—』

で広く知られている。また、こうした博士の地域に対する真摯な考えと多大な功績を讀み、それを受け継ぎ広めていこうとする多くの分野の先学が、日頃研鑽された高度かつ実践的な研究成果を披露された本書の意義は深い。評者は、本書をこのように解し、自らの力量も顧みず歴史地理学以外の論文もすべて評した。その結果取り違いも多いと危惧するが、お許しいただきたい。

(磯永 和貴)

杉浦 芳夫 著：

「文学のなかの地理空間——東京とその近傍」

古今書院 1992年4月

A5判 308ページ 3,200円

魅力的なタイトルの本である。おそらく文学者前田愛の著作『都市空間のなかの文学』をもじったのであろうが、人文主義地理学に多少の関心のある人はもちろん、それ以外の人でも、思わず手にとって中を覗いてみたくなることであろう。しかしながら、ヒューマンスティックな関心から本書を読み始めれば、その期待はあっさり打ち砕かれてしまう。そこに繰り広げられているのは、人文主義地理学とは別の、文学に対する著者のアプローチである。

本書の構成は次のようになっている。

1. はじめに
2. 武蔵野幻景——武蔵野台地とは？
3. 江戸の刻印——山の手・下町とは？
4. 鷗外の東京・露伴の東京——公共施設配置とは？
5. 本郷・小石川界限——認知地図とは？
6. 病める都会人の時計と洋燈——時間地理学とは？
7. 帝都の近郊——農業立地論とは？
8. 田舎教師の「マチ」と「ムラ」——中心地理論とは？
9. キャラメル工場への道程——空間的相互作用とは？
10. 太陽のない街の形成——工業立地論とは？
11. 光と影の都市空間——住宅立地論とは？
12. 避暑地の出来事——空間選好とは？
13. 噂が運ぶ花づくり——空間的拡散とは？
14. 反乱する岸辺——環境知覚とは？
15. 遠雷の場所——人間・自然環境ゲームとは？
16. 「青べか」の行方——地域産業連関表とは？

まず、1章は本書の趣旨説明だが、文学云々と言ってもやはりこの著者だと思わせる文章から早速ス